

[報告]

固定施設における献血者安定確保の取り組みについて

福井県赤十字血液センター

石田裕美, 齋藤雄一, 齋藤崇範, 河崎勝自, 中山澄恵
木谷真佐美, 南保利枝子, 山川裕士, 寺崎秀徳, 豊岡重剛About some action of the blood donor stability recruitment
in the fixed institution

Fukui Red Cross Blood Center

Hiromi Ishida, Yuichi Saito, Takanori Saito, Katsuji Kawasaki, Sumie Nakayama,
Masami Kidani, Rieko Nanbo, Hiroshi Yamakawa, Hidenori Terasaki and Shigetake Toyooka

抄 錄

当センターは郊外の人通りが少ない場所で、判り難く公共交通機関のアクセスも不便なため献血者確保に苦慮している。その対策として際立って献血者が落ち込む月をなくすため、従来のキャンペーンを見直して週単位のイベントや複数回献血クラブの試写会を企画した。血小板献血安定確保には、市町職員の送迎や先着粗品、くじ引き等により午前中の強化を図った。

平成22年3月に施設改修を行い、建物正面に「献血ホールいぶき」の愛称や「けんけつちゃん」の型別看板を掲げて所在を判り易くし、採血室やロビーを拡張して、コミック本等の雑誌・書籍や大型テレビを整備充実、併せて新聞・テレビ、メール等による広報に努めた。この結果平日午前中の血小板成分献血が増加、年間を通して月、日別による大きな変動が解消され取り組みに一定の成果がみられた。今後はさらに広報活動を強化し、イメージアップを図り、課題である若年層の献血率と献血者数のアップに努めたい。

Key words: blood donor, campaign, renewal, public relations

はじめに

現在、福井県内では、母体施設が献血者を確保するための唯一の固定施設となっている。昭和60年11月に新社屋完成後から採血施設としての業務を実施しているが、人通りが少なく、公共交通機関のアクセスも不便な環境は、認知度が低く献血者の安定確保に苦慮してきた。その対策として、従来実施していたキャンペーンやイベント等の内容を見直し、企画修正を行った。さらに、平成22

年3月には施設改修、名称変更により献血者確保に一定の成果を得たのでその取り組みについて報告する。

方 法

第1段階は、年間を通じ際立って献血者が落ち込む月をなくし、毎月安定的に1,000名の献血者確保を目標とし、献血者の減少する月について分析、検証を行い、通年型のキャンペーンや週単位

のイベントを企画した。従来は、「愛の血液助け合い運動」(7月)に合わせ「夏の献血キャンペーン」(7・8月),「はたちの献血キャンペーン」(1・2月)に合わせ「冬春の献血キャンペーン」(12~4月)の大型キャンペーンを実施していた。しかし、キャンペーン後は、安定的な献血者確保が困難な状況となり30%減少した。この状況を踏まえ、献血者確保の企画担当者を固定し、通年のイベントについてより具体的な立案を行った。内容としては、複数回献血クラブ会員確保を兼ねた映画試写会のスタンプラリー形式を7~11月のロングランで実施する事により、継続的な協力を得る事が可能となった。その結果、献血者の確保率の減少は平成18年度の30%から平成21年度の15%まで改善した。また、キャンペーン期間中にライオンズクラブ協力の抹茶と和菓子、健康相談とクイックマッサージ、似顔絵、占い、美容相談とハンドマッサージ等のさまざまなサービスを実施した。中でも好評かつ継続が可能なイベントについては、年間を通して実施し、複数回献血クラブへの会員増員に繋ぐことができた。なお、複数回献血クラブの会員数は平成18年度560名でしたが、平成21年度は2,382名に増大している。その他、地元大学生のミニライブコンサート、水仙娘による水仙プレゼント、スタンプラリー粗品進呈等も実施した。さらにホームページを活用したクイズ、リニューアルやキャンペーン時の来所者に記念品を進呈する等で再来につなぐための工夫も行った。

第2段階で、血小板成分献血の安定確保対策として市町職員の送迎事業を計画し、実施した。本年度の送迎事業は33回計画し、市町年間採血事業計画の中に盛り込むことで市町担当者の意識も高くなった。次に、主な企業や団体20カ所に待機型要請を依頼し、一部の企業には書面による覚書を交わし緊急時に備えた。このことにより、緊急時の依頼要請は迅速かつ円滑な実施が可能となった。また、平日の午前中の安定確保のために、先着者への限定粗品進呈や午前中の限定くじ引き等も企画した。さらに、血小板製剤の需要動向を見ながら数カ月間献血未実施者に対し、ハガキ、メール、電話など依頼要請を行っている。

第3段階として、広報の見直しに取り組んだ。

キャンペーンやイベント開催時に、新聞による報道、テレビとFMラジオの番組に“キャンペーンガール一日所長”や“けんけつちゃん”的出演による広報活動に力を入れた。とくに、FMラジオ2社に、予算化してオリジナルCM告知を契約することで番組出演が可能となった。さらに、ホームページ、メール、DM、各町内回覧板による県民への周知も積極的に実施している。

本年4月に施設全体のリニューアルを行った。採血施設としては、立地条件が悪く外観を見て病院と間違われるなど血液センターとしての認知度が低いため、一人でも多くの来所者を見込み、ハード面の充実を図った。県民に愛され親しまれる



写真① 映画試写会(会員限定)



写真② 抹茶・和菓子サービス

愛称として、「献血ホールいぶき」と命名し、名称を建物正面に大きく掲げるとともに、献血キャラクター「けんけつちゃん」の型別看板や懸垂幕を外壁に掲げ、献血ホールの場所をわかりやすくした。また、アクセスが悪いので、ロビーに公共交通機関の時刻表を掲示したり、駐車場案内ボードを一目でわかるように整備した。さらに、快適な環境で献血できるよう明るく開放的な採血室やロビーに拡張し、献血者などの意見を参考にしながら若年層をターゲットに新たにコミック本等の雑誌・書籍や大型テレビなどを整備充実させ、待ち時間の有効利用を図った。

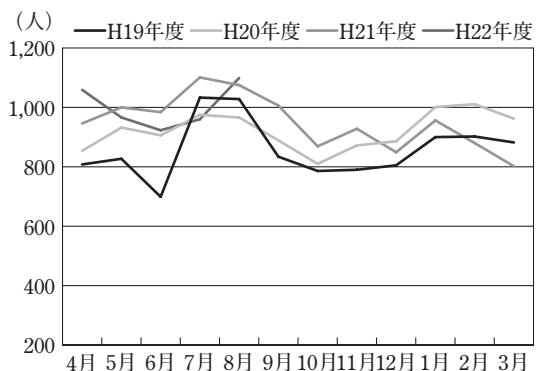
結果

これらの対策は平成19年度より段階的に実施してきた。その結果、献血者数は前年比が平成20年度107.5%（770人増加：1日当たり約2.5人増加）、平成21年度103.0%と伸びている。また、平日1日当たりの献血者数でも平成20年度112.4%，平成21年度107.1%と増加傾向にある。ところが、平成22年度（4～8月比較）は、原料血漿確保に伴うPPP採血の抑制により献血者数は前年比98.1%，平日1日当たりの献血者数も98.6%と減少している。しかし、血小板成分献血者数は前年比118.0%，平日1日当たりの血小板成分献血者数も116.3%と増加している。とくに、血小板製剤の需要増加に伴い、血小板成分献血確保を強化す

ることで、製剤業務集約後は午前中の血小板成分献血者数が増加した。また、月のバランスを平均化する対策も平成19年度は月平均858人であったが、平成21年度は950人と約100人増加し、平日の1日当たりの献血者数も平成19年度27.5人、平成21年度は33.1人と5.6人の増加となった。また、平日の血小板成分献血者数は平成19年度の17.9人から平成21年度は18.7人、平成22年度（4～8月比較）は、21.4人と年々増加しており、年間を通して平均的に推移している。

考察

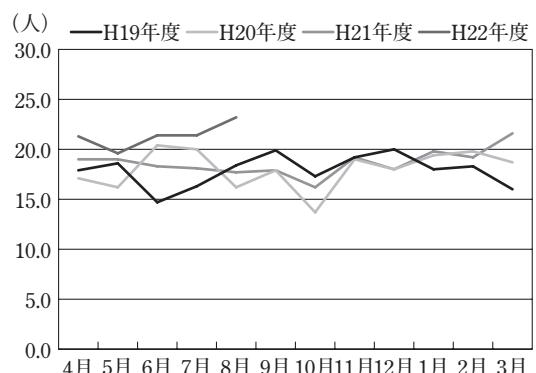
血液センター母体の施設別献血者構成比は平成18年度29.3%であったが、平成21年度では33.7%



表④ 月別献血者数



写真③ 「献血ホールいぶき」



表⑤ (平日) 1日当たり血小板成分献血者数

と増加している。また、年間の全供給量に対する採血率は100%以上であるが、日々の供給需要に対する不足する場合もあり、需給調整が必要であった。そのため、需給調整による他センターからの受入は平成18年度3.3%であったが、平成21年度は0.2%と減少し、日々の需要に対する確保は安定傾向にある。

血液センター母体の献血者構成比は約8割が成献血で、平日午前中の血小板成分献血がとくに増加し、年間を通して月別、日別による大きな変動が解消されてきている。また、キャンペーンや

イベントの実施にあたっては、担当者による積極的な企画内容も充実し一定の成果があったと評価している。しかし、近年の血液製剤使用量は、平成21年度は前年比で赤血球製剤102.7%、血小板製剤114.3%と伸びており、今後も増加傾向が予測されるため、更なる安定確保が必要である。

今後は、さらに、広報活動を強化し、イメージアップを図りながら、待ち時間を減少させることや有意義に過ごすための対策に取り組み、当県の課題である若年層の献血率アップと平日の献血者の安定確保に努めたい。